



秋田古財ランド 代表
越後 康一さん

【プロフィール】
1959年能代市生まれ。1984年木造住宅メーカーに就職、一貫して木材・建築・地域開発に従事する。2014年帰郷、15年「秋田古財ランド」開設。森林セラピストとしても活動

<https://gorohachiya.com/>
問い合わせ TEL.050-3635-8543

木の良さ、懐深さを 未来へとつないでいきたい

それは突然のひらめきだった。能代市の旧料亭「金勇」の大広間に何回か足を運び天井を見上げていたうちに、木目がふと山並みのように見えてきた。「これはキャンバスウッドだ!」。秋田杉に、柱でも床でもない「絵画用杉板」という新しい可能性を見いだした瞬間だった。

「木目こそが主役」という発想

越後さんが右手に持つ絵を見てほしい。魚の泳いでいる様子が描かれているが、水紋のような描写に見えるのは、下地の板の目そのものであることがお分かりいただけるだろうか。

「僕が思う秋田杉の卓越した良さは、木目の美しさです」。越後さんが、キャンバスとして世に広めている「絵画用杉板」は、樹齢80〜100年ほどの秋田杉の根柢(ねぢ)を斜めにスライスして板取りしたもの。住宅用構造材を取るときのような切り出し方ではないため、断面には複雑な模様が出現する。当然ひとつとして同じものはない。特に四季のある土地の樹木は、冬場に成長が遅くなるため年輪の「目」は詰まり、硬く色も濃くなる。この「冬目」の存在感と面白さを際立たせるため、越後さんはさらに周囲の軟らかい部分を削って凹凸を出す「浮造り仕上げ」を重要なポイントとしているという。それが山の稜線や水のゆらめきの

ようにも見え、作り手の感性によって無限の想像をそそるキャンバスとなるのだ。

「板に絵を描く手法はるか昔から東西にありますが、単なる下地として捉えられているのがほとんど。これは木目がモチーフであり主役。逆転の発想なんです」

人生のキーワード 木・森・ふるさと

出身は、「木都」能代市の米代川河口の町。和室の框(かまち)の部材製造と卸売を営む製材所の長男として生まれた。貯木場(ちよぼくじょう)が遊び場という環境で、おがくずの匂い、終業を告げる5時のサイレン、数度にわたる火災にも遭遇しながら育った。「生活そのものが木に囲まれ、友達も材木店の息子ばかり。框(かまち)を天日干しする家業の手伝いもしていましたね」

中学・高校はテニスに熱中し、都会への憧れから上京し私立大学に入学。大

学ではボランティアサークルや学生会活動に没頭した。家業は継がなかったものの、森林や木材に関連した住宅会社に就職。林業の専門商社として木材の流通に広く携わり、管理職としても知見を深めた。

「経営者やお客さんとの対話は楽しいものでした。充実もしていました。どこかで生き方への葛藤も抱えていて、54歳で退社。それからは自分と向き合う日々でした。単語カードに、自分の大切にしている事柄を書き出してみたら、木・森・ふるさと、というキーワードが並ぶんです。どうも僕の人生ここから離れられないようで、この大切さを伝えていかなければと思うようになりました」

古き良きものを未来へ

大量消費をベースにした経済のひずみ、輸入材の台頭による木材産業の斜陽、そんな状況を少しでも打開できないか。長年受け継がれてきた職人技に

よるものづくりや、繊細な美意識を伝えていけないのか。

親の介護も重なり、平成26年に帰郷した後、悩む頭でふとひらめいたのが、絵画用杉板というアイデアだった。持ち前の発想力と行動力で製材所や木工所と打ち合わせを重ね、同29年には実用新案特許も取得。「古き良きものを継承したい」という思いから、杉板のほか、天然の木肌の味わいを生かしたインテリア用品をメインに扱うウェブサイト「秋田古財ランド」も立ち上げた。

「僕は森林案内人としても活動していますが、人は森に入ると細胞から元気になることが立証されています。木の良さ、自然の懐深さを未来へとつないでいきたい」

樹木は、気の遠くなるような時の流れの中で育まれる。それをこの一瞬に生きる私たちが手に取る千載一遇の妙を思うと、確かに材というより「財」と呼ぶのがふさわしい。そして、越後さんの非凡な着想もまた、財である。